



龍飛（昭和31年） 撮影伊馬春部

スポット企画展

写真でたどる 太宰治『津軽』

令和8年

4月15日(水)～7月6日(月)

弘前市立郷土文学館 

【開館時間】9:00～17:00（入館は16:30まで）

【観覧料】一般100円、小・中学生50円

（弘前市内の65歳以上、市内の小・中学生、市内の外国人留学生、市内外の障がいのある方、ひろさき多子家族応援パスポート持参の方は無料）

〒036-8356 青森県弘前市下白銀町2-1（追手門広場内）

TEL 0172-37-5505 FAX 0172-36-8360

E-mail kyoudo@city.hirosaki.lg.jp



太宰治『津軽』（新風土記叢書7）
小山書店 昭和19年11月15日

太宰治の小説『津軽』は、太平洋戦争末期の昭和十九年、太宰が約三週間をかけて津軽半島を巡る旅の中で、ふるさとを再発見し「津軽人」としての自己を探しあててる物語です。本展は、太宰ならではの視点で書かれた心に響く名文と、現地の美しい風景写真で小説『津軽』の舞台をたどり、改めてその魅力に迫るものです。今回は、太宰の親友・伊馬春部（作家・劇作家）が、昭和三十一年に撮影した龍飛・十三湖などの写真も特別に展示します。



十三湖（昭和31年）
撮影 伊馬春部



桜祭りの芦野公園駅（五所川原市金木町）
撮影 長尾勝文



太宰治が描いた挿絵「津軽図」
（『津軽』所収）

◇芦野公園駅

窓から首を出してその小さい駅を見ると、いましも久留米紺の着物に同じ布地のモンペをはいた若い娘さんが、大きい風呂敷包みを二つ両手にさげて切符を口に咥へたまま改札口に向かって来て、眼を軽くつぶって改札の美少年の駅員に顔をそつと差し出し、美少年も心得て、その真白い齒列の間にはさまれてある赤い切符に、まるで熟練の歯科医が前歯を抜くやうな手つきで、器用にはちんと缺を入れた。少女も美少年も、ちつとも笑はぬ。当り前の事のやうに平然としてゐる。少女が汽車に乗ったとたんに、ごとんと発車だ。まるで、機関手がその娘さんの乗るのを待つてゐたやうに思はれた。

太宰治『津軽』